

算敏先生を悼む

外国語学部長 日 高 昭 二一

何とも唐突な死であった。死の気配など何一つ感じられなかった。だからそれは、どこか遠くのところから伝えられた事故として、あるいは見知らぬ他人の身の上起こった、非現実的な事件のようにさえ感じられた。

二月二四日、名古屋の通夜に駆けつけた同僚たちも、みな一様に信じられないという表情をしていた。その帰り、宿舎近くの料理屋でもごも語り合ったときにも、同じような感想がくりかえされた。当然のことであろう、何しろ四三歳という若さであったのだから。いや、たんに若さゆえではなく、その鋭利な論理と豊かな感情を持った先生の存在を、われわれの誰もが、事あるごとに深く頼みにもしていたのだから。

祭壇の正面に飾られた先生の写真。まぶしそうに、恥ずかしそうに笑っているお顔は、昨日まで出ていたそれにそっくりで、だから先生はまだ生きているという錯覚についついとらわれる。病身のお母様が、祭壇の線香を絶やさぬように、何度も立ちあがっては新しい線香を手向けている。そうして、会葬者の長い列が途切れたとき「主

人は普段から性急な人でしたが……」という奥様の声が聞こえてきて、花の中に飾られた写真がようやく死という事実を告げていることに気づいたが、だがそれでも、先生は都合によって不在であるという感じは、しばらくのあいだ残りつづけたのである。

寛先生は、名古屋大学文学部の専任講師を経て、一九九七年四月に神奈川大学外国語学部の助教授（基本科目：日本史担当）として着任された。その後、東白楽駅で階段を急ぎ足で駆け登るお姿をしばしば見掛けた。声をかけると、これから岐阜県に向かいますという返事。そういえば先生は、当地の博物館で学芸員をされている奥様と離れて、単身赴任をしていると聞いていたから、そこへ行かれるのだなと思ひ、また夜遅く駅に降り立ったお姿を見掛けたときは、ああ今岐阜県から帰ったところなのだなどと想像もした。ある日の夕刻、同じ駅で出会った折り、これから岐阜ですかと尋ねると、いや今日は渋谷に映画を見に行きますという答えが返ってきて、いかにも若々しく好奇心に満ちた表情をされた。

より親しくお付き合いをしたのは、先生が基本科目の主任となられたときだった。運営委員会では、会議が紛糾した折りなど、何度も助け舟を出していただいた。先生の主張は情理が噛み合っすこぶる説得的で、中途半端なところが決してなかった。気がつくとき、ほかの主任の方々も先生の主張にあいづちを打っていた。ときに、その未成を感じさせない明晰さ、完璧さに、若さの奥に隠された老練さを、ふっと感じたりもしたことだった。

一九九八年の秋、浙江大学の学術シンポジウムにご一緒した。堤先生と常民研の香月先生、そして今は東京外語大学に移られた沢田先生、それに当時在外研修で蘇州大学におられた浅山先生も合流されての一行であった。そのとき先生は、古代日本における拜跪礼について発表された。断片的な資料を周到に重ねつつ緻密な思考を組み立て

る、その巧みさに、しばし聞き惚れたことだった。帰途、蘇州や上海をめぐるの研修では、歴史家としての蘊蓄を至るところで伺うことができた。よく飲み、食べ、語りあった、それはじつに、じつに楽しいひとときだった。

その折り、先生は、極彩色に彩られた如来菩薩の絵と、中国の坊さんの僧服とお土産に買い求められた。帰国後、それを研究室の壁に飾り、われわれ同僚をかぐわしいお香のかおりとともに迎え入れてくれた。その光景は、さながら曼陀羅の世界に踏み入ったようで、一種異様な気分にとらわれたことを記憶している。

僧帽を被り、菩薩像の前に立った寛先生。その姿が、今ありありと甦る。むろん、そのお姿に先生の死を結びつけるのは、事後的な、そして小賢しい観察にすぎまい。おそらく先生は、ひと足はやく背広を僧服に着替えただけで、あとはいそいそと思考の行脚にいそしんでおられるのであろう。

さよなら先生、永遠に安らかであれ――